



革命エデュケーション 第一部

iPhoneの 先にある未来

【第二回】

クラウド・監視・他者との遭遇

【第二回】 クラウド・監視・ 他者との遭遇

3 個人情報も Web で管理

10 情報は見られている！

15 監視されても気にならない

20 他人はめんどくさい

■ 個人情報も Web で管理

鵜川 最近「すごいなー」と感じたのは、iCloud¹の発想。モノやデータを購入するんじゃなくて、権利を購入するという考え方ですよね。かつてあったコピーコントロールCD²とは、全く逆の発想。もちろん、それを実現するには、技術もプラットフォーム³も必要だったわけで、両者を同じ土壌では考えられませんが、そもそも数売って利潤につなごうって発想が基本了解だったのに、Apple

1 Apple 社の提供するクラウド・サービスの名称。従来の PC がハードディスクをベースにしていたのに対し、クラウド（・コンピューティング）においてはインターネットをベースにした利用を基本としている。

2 デジタルコピー抑止のために開発された CD。2002 年頃から各社で導入されたが、2006 年頃までには各社撤退している。

3 ソフトの動作基盤となる OS やハードウェアのことを指す。

には、消費構造そのものを改革して、新しいビジネスモデルを作りあげようという気概を感じる。『ユリイカ』のSNS特集で、ニコ動の夏野さんが言ってたんですが、ネットでは、最初からお金のことを考えるとほぼ失敗する、と。まずは、ユーザーの利便性を向上させることが第一なんですって。パソコンって、初期投資があって、その先に何かやりたいことがあれば、そこそこのお金が必要というのがかつての一般認識だと思っただけですけど、iPhone や iPod は、ソフトウェアそのものは無料か、非常に廉価なものが多い。そこから、コンテンツやアドオン⁵でお金を回収する。それこそ、音楽を聞

4 夏野剛「ニコニコ動画のコアにあるもの」『ユリイカ 2011年2月号 ソーシャルネットワークの現在』(青土社)

5 コンテンツとは動画・音楽・テキストなど、情報の中身のこと。アドオンとはソフトウェアの拡張機能のこと。

くソフトが売ってた時代があるっていうのが、今からすれば考えられないですね。

細井 そうそう、iPhoneが発売されたときに面白いなと思ったのは、iPhone用のアプリというのは誰でも作れて、それをリリースすることで無名のクリエイターでもチャンスを得ることが出来るという点です。そーゆーカレッジ・ビジネス的というか、才能さえあればキャリアは知名度に関係なく成功できる、という発想に立ってモノ作りをしているのがとてもアップルらしいなと思いましたね。ジョブズは基本的に、才能あるクリエイターにチャンスを与えたり、お金を受け取るべき人がちゃんとお金を受け取れるビジネスモデルを作ろうとしていて、既存の企業同士での馴れ合いとか予定調和

みたいなものから距離を置いているところが成功した原因なんだろうし、またクリエイターからの支持が多い理由なんだと思います。

iCloud の話をちょっとすると、どこからでもアクセスできるっていうのが個人的には魅力です。例えば iPod を僕は2台持ってるんですけど、片方にしか入ってない曲があると、当たり前だけでもう片方で聴くことはできない。だけど iCloud だと、どのデバイスでもアクセスできますからね。その意味で音楽と電子書籍に関して、すごく期待してます。

鵜川 データのバックアップも iCloud は優れてるんですね？ 話に聞いているだけなので、よくは知らないんですが、確かに、どのデバイスからでも等しくアクセスできるっていうのは、バックアッ

プやデータの共有に絶大な効力を発揮する。僕の活動はパソコンベースですが、Dropbox⁶の便利なことと言ったら、ちょっとないですね。職場でファイルを編集していて、そのまま家でも続きをやる。以前なら、パソコンのデータとUSBのデータ、どっちが新しいんだっけとか、せっかく編集したのに SkyDrive⁷に上げ忘れたとかあったけど、そういうことが起こらない。って、まあ、Web上に上げたファイルにアクセスできなくなる、という状況を全く想定から外しての話ですが。それと、特に問題になるのは安全性かな。

6 オンライン・ストレージ・サービスの一種。インターネットを媒介にして、複数のPC間でのデータ共有を容易に行える。

7 マイクロソフトの提供するオンライン・ストレージ・サービス。

細井 うんうん、そこなんですよね。確かにウェブ上で情報を管理することは、個人～集団を問わず共有できるメリットがあるけれども、第三者から見られているというリスクが確実につきまとうんですよね。日記が親や教員から見られているような（古典的な表現かな?）。そこを単純に便利だからいいよね、では片付けられないですよ。実際、Twitterでの発言も監視されていると言いますし。その意味で、SNSなりクラウドサービスというのは為政者が我々個人を監視するための便利なシステムだと言えるという考えはずっとあります。個人的なことを言うと、iPhoneのアプリにある位置情報サービスっていうのに、僕はどうしても馴染めません。TwitterとかFBで僕の現在地が他の人にもわかるってことな

んだけど、「どこにしようがいいじゃないか、放っておいてくれ」って気分になるんです。それが営業の仕事とかだったら尚更ですよ。でも将来、みんなスマホ持たされて、「常に位置情報をオンにしておくように」みたいな社会になったらイヤだなあ、と思うんですよ。陳腐な例だけど『1984』⁸的な。けど、実際にもう世の中はそうなってると思います。僕が心配になるのは、世の中の人たちがそーゆーことに余りにも無自覚なんじゃないかということです。今の若い人たちがどれだけ日記を書いているかは知らないけど（それはそれで興味がある話題：笑）、SNS はかなりの割合でやって

8 ジョージ・オーウェル『1984年』（ハヤカワ文庫）。1949年刊行でありながら、ビッグ・ブラザーやニュースピークなど、現代の管理社会につながる世界像が提示されている。

ると思うんです。そうすると、「あなたの個人情報だだ漏れだよ」って言っても、「そーなんですか。でも、ただちに問題はないし」みたいな感覚の人間が当たり前になっていったりするのかなあ、という。要するに情報が誰かに見られてるってことに対する違和感をみんなが持たなくなっていくということですが、そこが個人的にはけっこう心配なところではあります。

■ 情報は見られている！

鵜川 外部化っていうことで言えば、記憶も知識も、これまでは主に紙を用いて外部化していたのが、今は Web 上に置かれている。大きくは、知識の形成のされ方やその運用のされ方の変化（集合知

やオープンソース)が挙げられるんだろうと思うんですが、もっと身近なところでは、写真だったりスケジュールだったり、個人的な感情や考えの流れのようなものまでが、Web上に存在している。これって、冷静に考えると、ちょっと怖いですよ。ある人の性格や思考傾向は、TwitterやSNSを見れば明らかだし、スケジュールも、個人の購買情報も、特定のIPアドレスからアクセスされたページの履歴もWeb上にある。その怖さが前景化しないのは、無根拠な信頼が成立してるからなんですよ。でも、個人の情報(の集積)を反映して、例えば検索した時の広告なんかは表示されている。

監視されてるっていう話はよく聞きます

9 これらは、個人や限定された組織(会社など)ではなく、Webを媒介にした多数の人間によって支えられている。Wikipediaはその一つ。

すね。実際に Twitter や SNS の記述内容や人間関係は、テロ対策に生かされているらしいですし。あと、見られてるっていうことで言えば、Google ストリートビュー¹⁰で問題化した部分は、これに近いのかも。自分の姿が誰かに見られている、さらされているという感覚は、どこまでがプライバシーなのか、どうやってプライバシーを守るのか、という問題を自覚させるに充分だったはず。なのに、細井さんの言うとおりの、「個人情報だだ漏れ」でも気にしていない人が、結構多い。だって、「こんなこと日記とかブログに書いちゃうの!？」、みたいなことが

10 Google ストリートビューは、Google の提供する Web サービス。世界各地の風景を主観視点で見ることができるのだが、その画像撮影時に写り込んだ私生活の様子がプライバシーの侵害であるとして問題を巻き起こした。

普通に書かれてたりするわけじゃないですか。Twitter だと、その敷居がさらに下がってる。個人が簡単に特定できるのにもかかわらず。僕自身は、見られている感覚が強いから（多分、細井さんもそうだと思いますが）書く場に応じて演じ方を変えています。

それでも、こちらの考えの及ばないところで、自分がデータ化されて監視／管理されている感覚はありますよね。例えば、Google 検索の PageRank テクノロジー¹¹ 自体、我々のネットサーフィンの経路がたどられることによって成立している技術ですし、あるいは、検索の時の予測表示では、こちらの考えや要求が先回りされて織り込まれている感覚を持ち

11 Web ページの重要度を判定する技術。Google 検索の精度を支えている。

ます。これは、Amazon とかの商品紹介では更に先鋭化されていると感じる。さらにさらに、Twitter や mixi では、フォロワーやマイミクの関係性から、友人でありそうな人のアカウントが紹介されて、そことつながることを勧められたりする。実際にそれが知っている（けど、つながるほどの関係ではない）人だったりすると、純粹に Web 上のデータだけからその関係が推測され、実際に当たっているということに、かなーり、いやな気分を覚えますね。ただ、最近では慣れてしまっている部分もあって、そういうところを気にしないことができるようになってきている。現実が変わっているわけではないのに、違和感を維持できない。怖いですよ、単純に。細井さんの言う「位置情報」も、そのうち、公開していない人

の方が後ろ指さされるみたいな時代が来るのかもしれない。それこそSFですね。

細井 1990年代後半生まれの子って、物心ついたら Web 2.0¹² が当たり前になってる世代なんですよ。そうなると、今出てきているような違和感を感じることは難しいのかもしれない。要するに僕たちが「TVのない社会を想像しなさい」と言われてるのと同じようなもので。

■ 監視されても気にならない

細井 さっき書いた支配の話に戻りますが、かつての社会と個人の関係性においては、社会が管理力を強めることは個人の自由を奪う可能性がある、というので否定的に語られていたわけだけれど、あ

12 一方的な受信者に過ぎなかった大衆が、Webを通じて発信者になることができるようになった状況。2000年代中頃から盛んに言われるようになった。

る時期から権力の側に人々が管理されることを委ねているという状況があるというのは、90年代以降に良く語られた話ですよね。僕はこの話が好きなので良く引用しますがけれど（笑）、子供を公園で遊ばせておくのは心配だから監視カメラをつけてくれ、と親たちが要望したというような例ですね。確かに抑止力にはなるかもしれないけど、本気で子供たちを殺そうとしてる人間が来たら、当然何の役にも立たない。そういうことに気づかないで、自分自身が監視されるという負の可能性に気づかないまま、自らを権力の監視下に置こうとしている。似たような状況が、現在のネット上でも起こっていると感じます。

鵜川 その「監視」という点に関して、今、ふと思ったんですけど、大衆（僕は

一体何者だ、っていう…笑)は「監視」したりされたりすることに、そんなに関心がなかったりして。リアルの話に引き戻しますが、例えば職場にいろんな人の動向をよーくチェックしてる人がいて、それってじゃあみんながそうしてるかっていうと、意外とそうでもない。他人にそこまでの興味をさけないし、一方で自分がそういう人に見られていることに嫌悪感や危機感を持つかっていうと、そうでもない。隣に誰がいるのか、っていうことが気にならないというか、気にしない。ネットでも、自分たちのコミュニティがあって、その外にも確かに世界が広がっているはずなんだけど、今あるつながりにしか興味がないから、自分が外から見られていようがどうでもいい。なんか、子供の社会みたいですね。コミュニ

ティそのもののつながりが強固だからなのか、それともコミュニティ内部からの視線に対応することの方が大変だからなのか。って、とりあえずコミュニティの話に限定して話しちゃってますが。

細井 ネット社会に関して言うと、やっぱり内部の視線の方に気を取られてるというか、優先順位はそっちなんだと思うんですよね。KY的な。僕たちくらいの年齢になるともう気にもしないけど、常時 Web に接続できる時代だからこそ、リプ¹³をすぐ返さないみたいなの。そーゆー中で、さっきも書いたような外側に対する想像力が去勢されてきてるのかなー、って気もするんですよね。実際、Twitter とか FB でコミュニケーションしているのは、基本的に興味・関心が同

13 リプライ。Twitter で、あるつぶやきに対する返信。

じ方向を向いている人たちです。で、ネットでそういう人たちとばっかり接すると、現実の多種多様というか猥雑^{わいざつ}な人間関係が耐えられないように感じるんじゃないかと。いわゆる「島宇宙」¹⁴ですよ。僕は3.11以後の原発に関する議論にそれをすごく強く感じました。自分の周りは基本的に反／脱原発の人間が多かったんですが、多くの人がそこでヘンな安心感を持ってしまっている気もしたんです。やっぱオレたち正しいじゃないか、みたいな。でも実際には原発は当分の間稼働し続けるわけで。陰謀論めいたことを言うと、「島宇宙」で反原発派のガス抜きをさせてるんじゃないか、っていう仮説も成り立つような（笑）。そういう

14 文化の細分化によって生じたコミュニケーションの不全状態。社会学者 宮台真司の用いた概念。

のを考えると、僕はネットにおけるソーシャルティというのを余り信じていません。確かに一種の理想を持った人たちがつながれる可能性は持っている。だけど、現実社会にはもっとわけのわからない人間たちが沢山いる、っていうワイルドさの方が、やはり良くも悪くも力強いというか、説得力があるなあと思います。

■ 他人はめんどくさい

鵜川 同じようなことを強く感じたのが、mixiの「イイネ!」。この機能がmixiにおける人間関係の在り方を象徴的に示していると思います。結局、ここには異質な他者はいないんですよ。いるのは、自分の日常や考えに対して「イイネ!」と言ってくれる人だけ。日記のコメントも、基本的には同じです。無限

増殖する自己、みたいな気持ち悪さがそこにはある。リアルな社会関係だと、自己と相同的な他者を探そうとすれば限界があるし、その社会関係は閉鎖的なものになる。そして、その閉鎖性は当然ながら、かなり自覚的に維持される。一方、SNS上のコミュニティは、異質な他者に対して閉鎖的なのに、閉鎖的なまま拡大していく。拡大していくと、自己の価値観を相対化する視点がないままに、自己肯定感だけが肥大化していく。そうすると、結局、相互承認を基礎においたコミュニケーションだけが保存されていき、「わけのわからない人間たち」は排除されていく。

うわあ。書いてて気持ち悪くなってきた(苦笑)。

そこで思い起こすのは昔の2ちゃん

ねる。あんまりヘヴィに閲覧してたわけ
ではありませんが、みんなそれなりに
熱くなって、¹⁵ディスることこそ存在意
義、みたいな感じだったじゃないです
か。ただ単にニヒリスティックであるこ
とは、僕は決して好きではありません
が、それでも世間に対して斜めに構えた
態度には、オタクの気骨（笑）のような
ものを感じたものです。そういう意味で
は、Twitterの方がまだ、ワイルドさ (!!)
の可能性があるとは思いますが。飛び交う
言葉がかなり多様ですから。ただ、やっ
ぱりフォローする主体が自分である以
上、どうしてもそこに十分に他者が織り
込まれることはない。だとすれば、どう
やってそこにいない他者への想像力を途
切れさせないようにするか……。やっぱ

.....
15 「けなす。ののしる」という意味のネットスラング。

り、現実社会ってことになります？

細井 僕自身は現実社会とネットを二項対立では捉えていません。相互に侵食される関係、という感じだと思っています。とはいえ、現実とネットの一番大きな差異は、行動に関わるレベルで生起すると僕は考えています。やはりネット上であれ、何かしらのアクション、しかも他者との関係性を含んだものを形にするには、「現実的」な手続きを踏まざるを得ない。そうすると、必然的に面倒な手続き＝他者との遭遇を果たさざるを得ないというのが僕の考えなのですが。その意味で危惧しているのは、異質なもの＝他者という認識です。これは自分の同世代にも感じるころではあるんですが（苦

笑)。鷺田清一¹⁶ 風に言えば（笑）、本来家族や恋人すら他者なわけですよ。にもかかわらず、赤の他人を自分と近いものと感じて、しかもそれが当たり前になっている環境というのは、ちょっとどうなんだろう？ という気持ちになります。ちょっと古典的な話になるけれど、テクノロジーだけが一人歩きして、倫理というルールがない状態。

鶴川 現実社会をネットに対置できないのは、僕も同感です。ただ、すでに細井さんが言ったことですが、「物心ついたら Web 2.0 が当たり前になってる世代」が、はたして「他者との遭遇」を果たせるのか、そしてその結果発生する「現実的な手続き」を踏むことができるのか。

16 哲学者。『じぶん・この不思議な存在』（講談社現代新書）など。

いたずらに悲観的になるつもりはありませんが、どうしても難しい気がします。

(以下次号)

《革命エデュケーション》

iPhone の先にある未来

【第二回】クラウド・監視・他者との遭遇

平成24年5月21日 発行

著者 細井正之・鵜川龍史

編集者 鵜川龍史・細井正之

発行所 世田谷学園 国語科